

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 花方寿行

本論文「我らが大地——19世紀イスマノアメリカ文学におけるナショナル・アイデンティティのシンボルとしての自然描写」は、19世紀イスマノアメリカ(スペイン系アメリカ)を代表する四人の文学者が世紀の前半に発表した文学作品のいくつかに焦点を当て、そこに見られる自然描写の仕方の変遷を綿密にたどり、それを当地域のナショナル・アイデンティティの意識の変化と結びつけて論じた野心的な論考である。M・フーコー、E・サイード、B・アンダーソンといった批評家の理論を踏まえた上で、19世紀前半のイスマノアメリカにおける社会と文学の関係を広く見渡し、さらにそれを18・19世紀欧米の文化・文学の流れと関連づけており、その視野の広さは特筆に値する。

論文は序章と本論5章、および終章からなる。以下に内容の概略を記す。序章では、先行研究が作家や作品を個別に扱ってきたことを批判し、本論文の採る方針と方法を明確にしたのち、論文全体の構成、鍵概念となる「ネーション nation」という語の定義、対象とする作品の選択基準などを示す。続く第1章では、18・19世紀のイスマノアメリカにおける思想や文化の状況を紹介し、また第2章以降で展開される作品分析の理論的枠組みを提示する。第1節では、アンダーソンやJ・C・チアラモンテらを援用し、独立運動を通じて徐々に形成されたこの地のナショナル・アイデンティティが、当初きわめて流動的なものであり、ネーションと捉えられるものが時と場合に応じてイスマノアメリカ全域に広がったり、メキシコ、ペルーといった独立後の各国になったり、さらには各国より小さな行政単位にまで狭まったりしたことを指摘する。第2節では、自然風土が住民の性向に影響を及ぼし、ひいては固有の法制度や政治体制を育むのを助けるという発想が18世紀ヨーロッパで広まり、それがフンボルトらの活動を通じてイスマノアメリカにも伝わったことを述べる。第3節では、絵画的な対象として自然を見る傾向が同じく18世紀ヨーロッパにおいて生まれ、視覚的な自然描写が偏重されるようになること、当初は外部の真実を非時間的に認識する手段と見なされていた視覚が、19世紀に入って時間の経過や観察者の主観と不可分のものとなることなどを、主にJ・クレーリーに依拠しつつ論じる。第4節では、フーコーの一望監視施設(パノプティコン)やサイードのオリエンタリズムの理論を前提とした上で、パノラマ的な風景描写が必然的に権力と支配の装置として機能することを指摘し、イスマノアメリカの知識人たちがみずからのアイデンティティを確立するためにそうした風景描写を活用したこと、しかし彼らの企ては、自分たちのものであるがゆえに本来自明であり、不可視であるはずのものを意識化し、顕示するという矛盾をはらんでいたことを明らかにする。

第2章では、ベネズエラ出身の大知識人アンドレス・ベリヨの詩作品を分析する。長篇詩「詩神への誘い」(1823)を取り上げた第1節では、文明化され頹廢したヨーロッパ(=

都会)と無垢で健全なイスポアメリカ(=田園)との断絶をベリヨが強調し、後者を称揚して文化上の独立宣言を行っていること、パイナップルや椰子などアメリカ大陸原産の作物をカタログ的に並べて名指し(新古典主義特有の描写法)、それらの「占有」を企図してこの地域の独立を正当化していること、その一方で、詩のある部分では故郷カラカス周辺という限られた土地を自身のネイションと想定していることなどを示す。長篇詩「熱帯地方の農業に捧ぐ」(1826)を分析対象とした第2節では、イスポアメリカ独自の植物名に注釈を施すという工夫によって、作者がそれらを教養語に格上げし、権威を付与していること、土地の開墾や耕作といった農業活動の奨励を通じて、自然の「占有」を企てていること、森林開拓や焼き畑の描写には、ロマン主義の先駆けとなる激しい動きが見られることなどを指摘する。長篇物語詩『亡命者』(1844ないし1845~未完)を扱った第3節では、この詩の書かれた時期が、汎アメリカ主義の潮流が退き、新たに成立した国家を単位とするネイション意識が確立した時代であったことをまず確認し、ここに窺われるベリヨの異邦人としての意識や疎外感(ベリヨは当時チリに移住していた)をその執筆年代との関連において論じる。また、前二作とは反対に、この詩に描かれた草花や山河が土地固有の要素ではなく、国境を越えて作者の故郷を想起させるものであることに論及する。

第3章では、キューバ出身の詩人ホセ・マリーア・エレディアの詩作品を検討の対象とする。二つの詩篇「 Cholula神殿にて」(1820)と「ナイアガラ」(1824)を分析した第1節では、ロマン主義にそくした自然描写の新しさを指摘し、推移する時間の中で特定の人物の主観によって捉えられた日没や瀑布が描かれていること、外界の描写と語り手の内面描写が重なり合うこと、語り手はオリエント(異郷・他者)を眺めるヨーロッパ人とよく似た姿勢で描く対象と向き合っていること(ヴォルネーの『廢墟』からの影響)などを例証する。第2節では、「太陽に捧ぐ」(1821)、「嵐の中で」(1822)、「キューバの星」(1823)など祖国キューバをうたった詩を取り上げ、ここでの自然描写にキューバの独自性の強調は見られないこと、逆に、祖国の自由化や独立を訴えた詩には具体的な自然描写が欠如していることを示す。かくしてナショナル・アイデンティティと自然描写は、エレディアにおいては通常結びつかないという結論に達するが、その唯一の例外として、第3節では詩篇「メキシコ学院開校式にて」(1826)を扱う。この詩は嵐や雪山、滝といったアメリカ大陸の自然が芸術的価値を具えることを言明しており、ここにはベリヨの「詩神への誘い」の影響が感得されるという。

第4章では、アルゼンチンの作家エステバン・エチェベリーアの諸作が議論の中心になる。本章と次章への導入の意味をもつ第1節では、アルゼンチンにおいては他から区別されるネイションの意識が比較的容易に形成されたこと、その一方で、中央集権派と連邦派の抗争によって分裂した国民を統合するアイデンティティのシンボルが必要とされたこと、さらにそうした動向の中で「37年世代」がどんな役割を果たしたかを略述する(エチェベリーアと次章のサルミエントは、この世代に属する)。第2節では、論文「五月協会の社会的ドグマ」や『詩集』序文などを分析し、ベリヨやエレディアの汎アメリカ主義とは異なり、エチェベリーアが独立を果たした各国をネイションと捉えていること、アルゼンチン

固有の自然を描き込んだ「国民文学」の創出を訴えていることなどを指摘する。第3節では長篇物語詩「虜囚」(1837)の第1歌を論じ、作者がエレディアやヴォルネーの描写法を踏襲してパンパや先住民をオリエント風のものとして提示し(西欧オリエンタリズムの言説の利用)、先住民の撲滅を正当化していることを示す。「虜囚」の後半部に議論を進めた第4節では、作者がベリヨと同様の戦略に訴え、アルゼンチン独自の風物に注釈を付したこと、危険で苛酷な辺境地帯としてパンパを描き出したこと、苦難の末にそこで死を遂げる主人公たち(キリスト教徒)の姿を伝説として語り、神聖化し、彼らを征服のシンボルに仕立て上げていることなどを明らかにする。

第5章では、アルゼンチンの文筆家で大統領も務めたドミンゴ・F・サルミエントの社会論『ファクンド』(1845)を取り上げる。第1節では、サルミエントが本作で援用したコストウンプリスモなる手法(社会集団の中から典型的な人物を選び出し、その姿や行動を客観的に観察・描写する)を解説し、作品の構成と特徴を述べる。主に『ファクンド』の第1章を検討した第2節では、「国民性は自然風土によって決定される」という環境決定論にサルミエントが立脚し、アルゼンチンの多様な自然をパンパ=荒野に単純化した上で、パンパとそこに住むガウチョ(牧童)をオリエント風で前近代的な存在、ヨーロッパ近代文明によって征服されるべき存在として描いていることを示す。しかし同時に、ガウチョの力強さや自尊心を、アルゼンチン人の国民的性格として称賛していることにも言及する。作品の第2章に特に着目した第3節では、作者がパンパとガウチョに美的価値を見出し、それらを「国民文学」の主役に位置づけていること、占有し、一体化しているはずのもの(パンパ、ガウチョ)から距離を置き、客体として描写するため、ガウチョの視点とよそ者の旅行者の視点を交互に採用していること、「見る主体」としてのみブエノスアイレスを表象することで、サルミエントが中央集権制を正当化していることなどを明らかにする。

終章では、まずここまでの議論を整理し、19世紀前半、独立を達成したイスマノアメリカ諸国の国境が定まってゆくにつれて、作家たちのネイションの捉え方も、当初のイスマノアメリカ全域から各国へと縮小したこと、自然描写の手法が非時間的・普遍的なもの(新古典主義、ベリヨ)から、時間の経過や動きを含んだ主観的なもの(ロマン主義、エレディア)へと推移したこと、エチェベリーアとサルミエントが、ベリヨの戦略(自然風土をネイションのシンボルとして利用)とエレディアの描写法とを組み合わせ、先輩作家の残した課題を克服したことなどを確認する。さらに、文学者たちが先行する言説を批判的に援用しながら生み出し、積み重ねたこうした言説の群が、19世紀半ばにはイスマノアメリカ全域で参照可能なひとつのアーカイヴ=表象装置を形成していたことを指摘し、最後に今後の研究の展望を述べて結びとする。

以上が本論文の概要である。本論文の主な学術的意義は、次の四点にまとめられる。第一に、先行研究においては個別に論じられることが多かった作家や作品を包括的に取り上げ、発表年代順に分析することにより、時代も傾向も異なる作家の作品が緊密な関係によって結ばれていること、これらの作品が順次影響を与え合いながら変化を遂げ、全体としてひとつの巨大な表象装置を構築していることを明らかにした点である。さらに、フラン

スの思想家ヴォルネー、ドイツの地理学者フンボルト、米国の作家クーパーなどとの比較検討を通じて、イスパノアメリカの文学者たちがいかに欧米の著作物を参照し、その言説を戦略的に自身の作品に取り込んでいるかを具体的に示したのも大きな功績といえる。

第二に、テキストを丹念に読み解くことにより、論文の随所で独創的な見解を示している点である。たとえば、通常取り上げられることの稀なベリヨの『亡命者』を高く評価し、その自然描写にベリヨの他の作品とは異なる意味を見出した箇所、サルミエントがブエノスアイレスの視覚的な描写を周到に避け、「見る主体」としてこの都市を提示している事実、中央集権制を正当化せんとする企てを看取した箇所など、傾聴に値する指摘は少なくない。

第三に、文学史上パンパの写実的な描写を初めて行ったのはエチェベリーアの『虜囚』であるとする先行研究の見方に異を唱え、エチェベリーアの描写が実はエレディアの「チヨルーラ神殿にて」を下敷きにしていることを明確な形で示した点である。

第四に、日本におけるイスパノアメリカ文学研究への貢献という観点から言うと、本論文は19世紀イスパノアメリカ文学について我が国で著された数少ない本格的論考のひとつとなっている。日本でこの地域の文学を研究する者の大半は、20世紀以降の現代文学に関心を集中させており、現代文学の基盤をなすはずの19世紀文学にはなかなか目を向けようとならないのが実情である。本論文はこうした現状に一石を投ずるものであり、この地域の19世紀文学研究に携わる者が今後必ず参照すべき基本文献となるのは間違いない。

以上のような意義を有する本論文にも、次に挙げるような弱点のあることが審査員の間から指摘された。第一に、スペイン語圏以外の欧米の思潮や文学に言及するとき、ときに論述が不十分であったり正確さを欠いたりする点である。たとえば、18世紀に発明された光学スペクトルのパノラマとゴシック小説の影響関係、崇高美学に関する説明などにそうした問題点は見られ、結果として第1章で提示された理論的枠組みがやや脆弱になり、第2章以降の作品分析に必ずしも有効に機能しなかったうらみがある。

第二に、本論文の重要な論点のひとつは、「地域の政治形態の変化につれて、ネイションの観念が変わった」というものであるが、この指摘自体は取り立てて力説するには及ばない至極当然のことと考えられる。

第三に、パンパやガウチョがやがて文明社会によって同化・征服されることをエチェベリーアとサルミエントは作品中で予告していると執筆者は言い、その予告の手法をロマン主義特有の「時間の経過を取り入れた描写」と結びつけるが、この両者がどうつながるのかが分かりにくく、説明が不足していた点である。

しかしながら、こうした弱点は今後克服されるべき課題であり、本論文の学術的意義をいささかも損なうものではない。したがって本審査委員会は、全員一致で本論文が博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと認定する。